

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 41

## \*カルヴィーノとレオパルディ\*

堤 康徳

イタリア文学史上最大の詩人のひとり、ジャコモ・レオパルディ。19世紀のイタリアに彗星のごとく現れ、特異な輝きを放ちながら、足早に夜空に消えていった詩人。幼少の頃から病弱だったレオパルディは、父モナルドが自宅に作った図書館にこもって、ひたすらその万巻の書物を読み、若くして驚くべき博学を身につけた。ギリシア・ローマの古典の素養と、ペトラルカに発するイタリアの詩法の伝統を吸収した。レオパルディの文学はしかし、自らの幸薄き生に起因すると思われるペシミスティックな世界観を色濃く反映させている。



【ジャコモ・レオパルディ】

出典: [https://it.wikipedia.org/wiki/Giacomo\\_Leopardi](https://it.wikipedia.org/wiki/Giacomo_Leopardi)

レオパルディは、1798年、当時教皇領だったマルケ地方のレカナーティに生まれた。生まれ育った反動的な環境と、青春を覆った王政復古の重苦しい時代への反発。学識と才能を評価できない周囲への不満。貧弱な身体。読書を困難にする目の病。成就するこのなかった恋。1837年、喘息などの持病の悪化にともないナポリで死去するまで、レオパルディの短い生涯はどの局面をとっても、楽しいエピソードとは無縁だった。

\*

レオパルディについての、たいへん読みごたえのある重厚な研究書が今年2月に出版された。古田耕史著『ジャコモ・レオパルディ——ロマン主義的自然観と〈無限〉の詩学』（春風社、2022年）である。日本語で書かれた初めての本格的なレオパルディ論といえよう。多角的な視点から論じられたこの本に教えられるところは多々あったが、とりわけ興味を引かれたのは、スタール夫人の著作との近親性の分析である。ロマン主義の旗手ともいえるスタール夫人と、ロマン主義そのものには批判的だったレオパルディが、じつはその自然観や想像力論において共鳴していたというのである。古田によれば、両者には世界認識の方法の共通点が見られる。すなわち「理性だけではなく、想像力や直感が真実を知るためにはどれほど役に立つか」という考え方である（そのような認識法を、スタール夫人もレオパルディも古代人の特質と見なしていた）。レオパルディの座右の書であったスタ

ール夫人の『ドイツ論』(1813年)の次の一節に、彼女がレオパルディに与えた影響が垣間見られるという。

実験や現代人によって獲得された新しい機械の助けなしに、そのような[ピタゴラスの天文・音楽学に関する]驚くべき発見がどこからやってきたのだろうか。古代人はつねにその天才によって啓示を受け、大胆に歩んでいたのである。人間の知力の基盤である理性を使ってはいたが、自然の巫女である想像力にも助言を求めていたのだ。<sup>1</sup>

スタール夫人はピタゴラスについて、「惑星どうしが豎琴の7本の弦と同じく等距離にあると主張した<sup>2</sup>」と書いている。1813年、わずか15歳のレオパルディが書いた『天文学の起源から1811年までの歴史』(*Storia della astronomia dalla sua origine fino all'anno MDCCCXI*:以下『天文学史』と略記)にも、ピタゴラスをめぐる次の記述がある(レオパルディはこの時点ではまだスタール夫人の著作には接していないが)。

天体どうしがハーモニーを作り出し、天上の神々がそれを享受しているとピタゴラスは教えた。<sup>3</sup>

レオパルディは、このピタゴラスの説を、キケロが『国家論』第6巻「スキピオの夢」において採用したようだと書いている。ピタゴラスが唱えたとされる天体の奏でる甘美な音楽について、レオパルディは、『オペレッテ・モラーリ』(*Operette morali*)の「大地と月の対話」(*Dialogo della Terra e della Luna*)のなかでも触れている。<sup>4</sup>

レオパルディは、『天文学史』を以下のような一文で始めている。

自然科学のなかで最も崇高で高貴な学問は、まちがいなく天文学である。人間は天文学によって、いわば自分自身の上に立ち、数々のきわめてたぐいまれな現象の原因を知るにいたる。

5

「数々のきわめてたぐいまれな現象」とは、日蝕や彗星の出現といった天体現象を指すと考えられる。この数段落先で、戦争前の日蝕に驚いて太陽と月と大地に生贄を捧げたアレクサンドロス大王など、古代人の迷信が列挙されているが、彼らとは対照的に、彗星の運行を解明した科学者として、ニュートンの名が挙げられている点が注目される。

イギリス教会のローマ教会からの離脱は、彗星が予告したと信じられた。1680年、不世出の科学者ニュートンが彗星の運行について考察し、彗星を自らの法則に従わせたのにたいし、無知な世界はいまだに彗星の出現に震撼していた。私自身も、1804年2月11日に起きた日蝕が村人たちに引き起こした驚愕を目撃したのだった。<sup>6</sup>

さらに、ニュートンについてレオパルディは以下のようにも述べている。

天界の自然と地上の自然を結合させるには、それらの現象が同一であり、同じ原因によって動かされ、同じ法則によって規定されていることを証明する必要があった。このことこそ、われわれがニュートンに負っていることなのだ。<sup>7</sup>

レオパルディはここで、ニュートンが地上世界と天上世界を同一の物理法則に従属させたことを的確に指摘しているのである。

\*

レオパルディは、カルヴィーノの文学観に多大な影響を与えた詩人である。評論集『アメリカでの講義』の「軽さ」の章のなかで、レオパルディは以下のように評されている。

ジャコモ・レオパルディは15歳のとき、たぐいまれな博学の書『天文学史』を書き、そのなかでニュートンの学説を要約している。その最も美しい詩の数々に靈感を与えたレオパルディの夜空の観照は、たんなる抒情的な動機によ

るものではなかった。レオパルディは、自らが月について語るとき、何について語っているかを正確に知っていた。

レオパルディは、生の耐えがたい重さにかんする絶え間ない思考において、到達不可能な幸福感に軽さのイメージを与えている。鳥、窓辺でうたう女性の声、透き通った空気、そしてとりわけ、月がそうである。

月は、詩人たちの詩行に現れるやいなや、軽やかさと宙づりの感覚、静かで穏やかな魔法を伝える力をつねにもってきた。当初私は、この講演をすべて月に捧げるつもりだった。あらゆる時代と国における文学の月の場面をたどろう、と。しかしその後、月はすべてレオパルディにゆだねるべきだと決心した。というのは、レオパルディの奇蹟が言語から一切の重さをとりはらい、それを月の光と似たものにしたからだ。彼の詩に多く出現する月の描写には、わずかの詩行しか費やされていないが、その光によって作品全体を照らし出すには、あるいは、その不在の影を投射するには、それで十分なのである。<sup>8</sup>

このあとカルヴィーノは、月をうたったレオパルディの詩行をいくつか引用しているが、本稿では、「アジアを流浪する羊飼いの夜の歌」(*Canto notturno di un pastore errante dell'Asia*)の冒頭の一節を引いておこう。

月よ、きみは空で何をしている？  
教えてくれ、何をしているか、静かな月よ。  
タベに上り、進んでゆく、  
荒れ地を見つめながら。そして沈む。  
きみはまだ空の小路の散策に  
飽き足らない？  
退屈もせず  
いつまでこの谷を眺めるつもり？  
きみの生活に似ている  
羊飼いの生活は。  
夜明けとともに起き、  
羊の群れを草地へ導き、

群れと泉と草を見る。  
夜は疲れて休む  
ほかに何も望まずに。  
教えてくれ、月よ、何の意味がある？  
羊飼いにあって、その生活は、  
きみたちにとって、きみたちの生活は？  
教えてくれ、どこに向かうのか？  
ぼくのこの短さすらいと、  
きみの永遠の運行は？<sup>9</sup>

レオパルディは、確かにカルヴィーノの言うように、月についての正確な科学的知識をもちあわせていた。だが、詩人レオパルディは、そのような知識を捨象した場所から、童子のように月を見上げているようにも思われる。

<sup>1</sup> 古田耕史『ジャコモ・レオパルディ——ロマン主義的自然観と〈無限〉の詩学』(春風社、2022年)、p. 53.

<sup>2</sup> Madame de Staël, *De l'Allemagne*, 5 voll., Paris, Librairie Hachette, 1959, vol. IV, pp. 262-263.

<sup>3</sup> Giacomo Leopardi, *Tutte le opere*, con introduzione e a cura di Walter Binni, con la collaborazione di Enrico Ghidetti, vol. I, Firenze, Sansoni, 1983, p. 634.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 99.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 585.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 586.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 702.

<sup>8</sup> Italo Calvino, *Lezioni americane. Sei proposte per il prossimo millennio*, Milano, Garzanti, 1988, p. 26.

<sup>9</sup> Giacomo Leopardi, *Canti*, a cura di Enrico Ghidetti, Firenze, Sansoni, 1988, pp.219-220.

(上智大学准教授)

## トリアッティ銃撃事件とバルタリの勝利

谷口 和久

1948年7月14日の昼前、イタリア下院の玄関先に銃声が響いた。

撃たれたのはイタリア共産党書記長(党トップ)、パルミーロ・トリアッティ。撃ったのは反共主義の学生であった。

トリアッティは3発の銃弾を受けて地面に倒れた。同行していたニルデ・イオットティ女史は、すぐさま体を覆いかぶせて、身を挺してトリアッティを守ろうとした。



【パルミーロ・トリアッティ】

出典: [https://it.wikipedia.org/wiki/Palmiro\\_Togliatti](https://it.wikipedia.org/wiki/Palmiro_Togliatti)

犯人はすぐに取り押さえられ、トリアッティは病院に運ばれた。意識はあったものの、予断を許さぬ状況であった。

傷つきながらもトリアッティは「落ち着け Stare calmi」、「おかしなことをするな Non fare pazzie」と周囲に伝え、自制を促した。この一件が少なからぬ余波を引き起こすことを自覚していたのだ。

トリアッティの制止にも関わらずイタリア全土で労働者によるストやデモが発生。各地で武力衝突が起き、死傷者も出る事態となった。電話はつながらず、電車は止まった。情報や人の流れが分断され、猜疑心や恐怖心が煽られた。

病院に運ばれたトリアッティは、緊急治療室で摘出手術を受けており、その生死は多くの人にとってまだ不明であった。

「トリアッティに万が一のことがあれば、ただでは済まない」。それは右派・左派、双方思うところであった。あわや内戦か、というところまで緊張が高まっていた。

日本でも1960年に、右翼の若者が社会党党首浅沼稻次郎を刺殺する事件が起きた。事件後デモこそあったものの、内戦寸前というほどの混乱からは程遠いものだった。そう考えると、彼我の国情の違いはあれど、事の重大さと情勢の深刻さがうかがい知れる。

手術は無事終了した。一命をとりとめたトリアッティは意識が戻ると、こう尋ねた。

「バルタリは勝ったか？」

\*

ここで、西側諸国で最大の共産勢力となったイタリア共産党の歴史を簡単に振り返ってみたい。

イタリア共産党は1921年に社会党から分離するかたちで結党された。草創期はファシズムの時代だったこともあり、非合法組織として地下や国外での活動を余儀なくされた。しかしながら粘り強く反ファシズム活動を続け、ムッソリーニが失脚する1943年前後からレジスタンス活動の中心になった。その中には作家のジャンニ・ロダーリなど、のちに著名になる文化人たちの顔ぶれもあった。

レジスタンス活動においては、「反ファシズム・反ナチスドイツ」の旗のもと、本来は思想信条の異なる組織 —カトリック教会や王党派など— との連携が求められる。しかしながら、それまでのわだかまりや戦後体制のことを考えると、お互い連携には足踏み状態であった。

連合国軍がシチリアから徐々に北進していたものの、中・北部はあいかわらずドイツ軍の支配下にあった。足踏み状態を見透かすようにドイツ軍はムッソリーニを幽閉先から救出し、北イタリアで傀儡政権を立ち上げた。イタリアの混乱はますます増すばかりだった。

そんな混乱のさなか、ファシストの迫害から逃れてモスクワにいたトリアッティがイタリアに帰国した。カトリック教会や右派は共産革命が進むことをおそれた。前号(2022年6月号)で取り上げた教皇ピウス12世も、イタリアの共産化をおそれるあまり、親ナチス的なスタンスを取っていたほどであった。かたや共産党の仲間たちは、トリアッティが帰国したことで共産革命が進むことを期待した。

ところが当のトリアッティは、そんなことよりも、まず第一にドイツ軍を追いやり、傀儡政権を倒すことを目標に掲げた。そのために自身の信条はいったん引っ込めて、カトリック教会や右派と手をたずさえることを訴えた。これが奏功し、レジスタンス活動は一本化。ドイツ軍を駆逐しムッソリーニを倒すことができた。現実には、他国での戦況や連合国軍の力によるところが大きいと思われるが。ちなみに、ムッソリーニの処刑を命じたのがトリアッティであるといわれている。

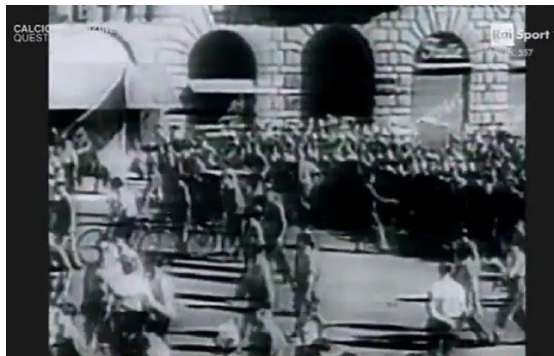
戦後、国民投票により王政は廃止。イタリアは共和制となり、キリスト教民主党を中心とする政権が発足した。

共産党は、戦中のレジスタンス活動を通じて勢力を拡大したこともあり、かなりの得票数を得て連立政権の一翼になった。トリアッティ自身も内閣の一員となった。

しかしながら、東西冷戦の勃発により、共産党の立場は危うくなった。戦後のイタリアはアメリカからの経済支援に頼らざるをえない状況となっていたが、首相のデ・ガスペリは経済支援と引き換えに、共産勢力を政治の中核から排除するよう、アメリカから圧力を受けた。また、冷戦により、国民の間でも共産主義に対する恐怖心・反発心が広まっていった。

こうして迎えた1948年春の選挙で、共産党は議席数を減らし、政権からも外された。このように

対立の深まった時期にトリアッティの銃撃事件が起きたのである。



【1948年のデモの様子】

出典: <https://www.youtube.com/watch?v=oc1EZISLhpg>

“Gino Bartali, la vittoria al Tour de France 1948”より

\*

病床のトリアッティが朦朧としながらもまっさきに気にかけてたジーノ・バルタリは、ちょうどその頃ツール・ド・フランスに出場していた。

第二次大戦のため中止となっていたツールは、前年の1947年に再開されたばかりであった。大戦前の1938年のツールで総合優勝したバルタリであったが、すでに34歳という年齢と、10年にわたるブランクは大きい。誰もそう思っていた。

しかも、その10年は単なるブランクではなく、戦争による中断なのである。「レースが最高の練習の場」といわれるように、レースを走るための足はレースを走ることでしか培われない。

そんなわけで、バルタリは自転車界の英雄ではあるものの、周囲の認識はずでに「過去の人」であった。「お年寄り Il vecchio」などと揶揄されるほどであった。まだ30なかばなのに。。

期待の薄さは、フランスにおもむく取材陣の少なさや、ミラノ駅での見送りの寂しさにもあらわれていた。

ツールが始まると、バルタリは初日のレースで勝ったものの、その後しばらくはなりをひそめ、中盤までに総合トップとのタイム差は20分を越えるものとなっていた。なにより若手の台頭が著しく、バルタリの走りはどうしても見劣りするものだった。

そうして7月14日を迎えた。この日は休息日で、選手たちはホテルでくつろいでいた。

そこへまず取材陣を通じてトリアッティの銃撃事件とイタリアの混乱が伝えられた。さらに首相のデ・ガスperiからバルタリあてに電話がかかってきた。デ・ガスperiは、バルタリの調子と勝利の可能性を尋ねた。首相とバルタリは、もともと友人だったとはいえ、調子を気に掛けるだけなら、いつでも電話のタイミングはあっただろう。



【ジーノ・バルタリ】

出典: [https://it.wikipedia.org/wiki/Gino\\_Bartali](https://it.wikipedia.org/wiki/Gino_Bartali)

翌7月15日は、アルプスの山岳地帯を越えるハードなコースであった。さらに悪天候がこのレースを過酷なものにした。しかしながら「鉄の男 Uomo di ferro」の異名をとるバルタリにとっては、むしろ好都合であった。ライバルたちとの差を詰めるチャンスなのだから。

この日のレースで勝利したバルタリは、総合トップまであと少しというところまでタイムを縮めた。そして、バルタリの勝利の伝わったイタリアでは、政治家たちも国民も、右・左問わずその勝利に喜び、爆発寸前となっていた緊張も解けた。バルタ

リの勝利がイタリアをひとつにまとめ、平安を取り戻したのである。

その後のステージでもバルタリは他を圧倒し、最終的に総合優勝をはたした。バルタリのキャリアで最も輝かしい勝利である。それは単に自転車の世界にとどまることのない勝利だった。

文化人たちもこの勝利に反応した。前号で紹介したクルツィオ・マラパルテによるバルタリ・コッピ評はその翌年に書かれたものである。小説家ディーノ・ブツァーティは1949年のジロ・ディ・イタリアに同行取材し、一冊の著書にまとめた。

\*

トリアッティがバルタリの勝利を尋ねた一件は、単なる逸話だという説もある。そもそもバルタリの勝利とデモの解除が直接つながりがあるものかどうか、はっきり答えられるものでもないだろう。それでも、自転車レースの影響力が大きい時代・大きい国があったということは間違いない。

#### 【参考文献】

- John Foot, *PEDALARE! PEDALARE!*, Bloomsbury, 2011
- Gioachino Gili, *Coppi e Bartali gli eterni rivali*, DeAGOSTINIL, 2009
- 『俺たちはみんな神さまだった』(ベンヨ・マソ著, 安家達也訳, 未知谷, 2017)
- 『ツール百話』(安家達也著, 未知谷, 2003)
- 『イタリア 20 世紀史』(シモーナ・コラリーツィ著, 橋本勝雄訳, 名古屋大学出版会, 2010)
- 『イタリア共産党史 1921-1943』(河野譲著, 新評論, 1980)
- 『イタリア共産党史 1943-1979』(伊藤昭一郎著, 新評論, 1980)
- 『パルミーロ・トリアッティ』(山崎功著, 合同出版, 1965)
- 『トリアッティとイタリアの道』(ルチャーノ・グルッピ著, 大津真作訳, 合同出版, 1978)

(当館スタッフ)

---

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>